

野呂邦暢

王国として地図



王国として地図

野呂邦暢

集英社



王国そして地図

一九七七年七月一〇日 初版印刷
一九七七年七月二五日 初版発行

定 価 九八〇円

著 者 野呂邦暢

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二五—一〇
電話 二三〇—六三六一（出版部）
二三〇—六一七一（販売部）

印刷所 大日本印刷株式会社

0035-77207-3041

© K. Noro, Printed in Japan, 1977
検印廃止・乱丁・落丁本はお取替えします。

野呂邦暢エッセイ集＊王国そして地図＊目次

I

河口への道	11
モクセイ地図	13
王国	16
川沿いの町で	19
水と犬と	22
魚屋さんの声	26
風と自転車	29
蟹たちの庭	32
夏の子供たち	36
燃えつくしたあとに	39
ある夏の日	41
歳月	45
名前	46
マザー・グースと推理小説	47
歩廊の眺め	49
露字新聞ヴォーリヤ	51
グラナダの水	55

その書店で 58

頭の皿 60

闇のなかの短い旅 64

引っ越し 68

土との感応 71

『筑紫よ、かく呼ばへば』 74

列車が出るまで 77

数学 82

切り抜き 83

コレクション 84

七人の侍 86

II

Rの回復 91

靴屋の親子 95

昔はひとりで……

107

手術台の私 110

単独者の悲哀 114

解釈がはじまる 118

グロテスク 121

猟銃 125

菜の花忌 127

幸福の暈 131

田舎の町から 137

水 144

退化 144

廃墟 145

ある漁村で 146

顔 147

ためらい 147

Ⅲ

壇の中の手紙 151

フィクションによるフィクションの批評

153

冒険小説の読みすぎ 157

クロッキープック 160

作家の眼 167

失われた富 175

夕暮の緑の光 183

戦記について 185

小説の題 188

日記という鏡 191

「草のつるぎ」 194

「海辺の広い庭」 197

「鳥たちの河口」 199

「諫早菖蒲日記」 202

初めての歴史小説 206

父祖の言葉をたずねて 209

IV

葦のしげみの彼方に 215

最後の光芒 221

手紙 225

列車の客 228

めぐりくる夏 233

一枚の写真から 236

空から降って来た手紙 239

死の影 244

泥まみれの青年たち 248

G三五一六四三 252

新幹線の窓から 257

日本の女性 258

家具について 259

有明海 260

遙かなる戦場 262

鳥・干潟・河口 264

春有明の潟で 266

河口をめぐる旅 270

天草北海岸 273

わが有明海 275

王国そして地図——あとがきに代えて

王国として地図

I

河口への道

三十数年くらしている自分の町だから、路地裏のすみずみまで知り尽しているつもりだった。どこへ行っても町のたたずまいは何の代り映えもしない。そぞろ旅心を覚える。

かといって列車に乗って名所旧蹟を見物に出かける気はまったくない。不精なのである。それに行ってみたところで目ざましいほど興味深い事物に出くわすことはあるまいと決めてかかっている。

ところが、つい先だって急用が生じて郊外の知人宅までバスでおもむいた。ふだんは歩くか、自転車を用いる。バスの窓から眺めるわが町の光景が妙に新鮮なのだ。見慣れた町並みも視点の位置を少しばかり高くしただけでまるっきり別の町のように感じられた。

用事をすませて私は市内循環バスというのに乗ってみた。バスターミナルでじつくりと路線図を検討してみると、未知の地名が数えきれないほど記入されている。私がバスを利用するのは、国鉄の駅へ行くときか、長崎へ出かけるときかにかぎられている。市内を循環する路線があることすら知らなかった。絶好のヒマつぶしである。全部に乗っても切符代くらい知れたものだ。

意外な所に道路が通じていた。森が切り払われて住宅地になっており、丘が崩されて公園になり、川が埋め立てられ、旧道がふさがれ、畑地が工場用地に変わっていた。

同じ土地にずっと住んでいてもここ五、六年の町周辺の変わり様はいちじるしい。バスの車窓から私は呆然と流れ去る風景を見ていた。小半日も乗ったあとにははるばる遠い町へ旅をした気になった。安あがりな旅もあったものである。今さら何を求めて遠方へ出かける必要があるだろう、というのが結論になる。

わが家の裏に川が流れている。諫早市を貫流して有明海へそそぐ本明川である。

循環バスで味をしめて、川沿いに海へ下る新しい散歩道を今度は自分のものとすることにした。今までは左岸の堤防上を河口へとたどったのだが、それを右岸にかえてみた。川の左右は上流に背を向けて決めるものと私は考えているのだが、もしかするとその逆かもしれない。

有明海でエビなどをとる小舟が、家の裏手にあたる船着場まで満潮時に遡航してくる。両岸はアシの深い茂みである。干潮時には潟が現われる。有明海沿岸ならどこにでもさらに見られる風景である。左岸から右岸にかわってみると同じ川でも若干、趣きが違う。舟とのりひびとカキ殻の山とアシと灰色の泥という眺めが私にはどんなに由緒深い神社仏閣よりも興味つきない。

河口まで歩くのに約一時間かかる。そこで煙草をぼんやりとふかして、今度は往路とは別な岸辺を帰ってくる。これが私の気ばらしである。

モクセイ地図

町あるきは街あるきでありたい。

町を辞書で引けば、商家の立ち並ぶにぎやかな通り、とある。街の字を当ててもいいだろう。人口七万あまりの小都市であるわが町にも二、三丁くらいは街らしい一角がある。そこを町でなく街と呼ぶときに覚える華やいだ気分が私にはすてがたい。

灯ともし頃にぶらりと外へ出てほつき歩く。この土地に移り住んで三十年以上になるから、どこに何があるかは知り抜いている。

灯ともし頃といわず実はまっ昼間も、ときには深夜でさえも、思い立てばさっさと家を出て街を歩く。時間にとらわれないのが自由業のありがたさというものである。

私は自分の土地に関して何枚かの地図をこしらえあげた。

一枚はモクセイ地図と呼んでいる。

街のあちこちにあるモクセイの所在を示す地図である。ちゃんと紙に書きしるしているわけではない。私の脳裡にしかない紙に黄色い点を打つだけだ。ながいあいだ、一つの土地に暮していると、どの家の庭にどんな恰好のモクセイが枝をひろげているかは、おおよそ察しがつくようになった。

高い塀にさえぎられて見えなくても、秋になれば漂ってくる香りで自然にそれと知られる。これは隠しようがない。だからある角を折れるとき、前もって流れてくる匂いを秘かに期待していることがある。

せんだって所用のために一週間ほど上京した。帰省してもあわただしかった旅の時間がまだ続いている気がして、机に向つても落ち着かず、しょうことなしに街へ出ていつものように諸処方々をうろついてみた。街の雰囲気でなんとなく勝手がちがうと思つたのは、上京する前は路地の奥にあれば濃くたちこめていたモクセイの匂いが、ふつつりと絶えてしまっていることだった。

流れてくるのは水のような秋風ばかり。たとえわずか七日間でも時間は時間である。私が自分の町を留守にしている間にも確実に時が経過したことを思わないわけにはゆかなかった。これはごく当り前なことなのに、そしてもしかしたらそれゆえに、心のどこかがひやりとする。

もう一枚は水神地図と呼んでいる。

魚をわきにかかえた稚拙な石像が旧市街の路傍に見受けられる。花や菓子がそなえられているのを見ることもある。赤い布で前掛けをしている水神もある。もつとも皆が皆、手あつく祭られているわけではなくて、数多いなかにはうち捨てられてかえりみられない石像もありはする。

わが街は大小の川で区切られ海にも近い。ひと雨ごとに洪水が街を水びたしにすることは珍しくなかった。昔から諫早には流れ町の異名があった。おびただしく散在する石像はかつてのむごたらしい災害のしるしでもあり、また土地の人々のふるい信仰を示すものでもある。水神は水難よけに靈験があるとされた。石像は川沿いの土地だけにあるとはかぎらない。高台にも見出すことがある。